



学校教育講座 浅井 健介 特任講師



W・ベンヤミンを中心とする近・現代思想を手がかりとした教育思想研究



キーワード 教育哲学・思想史/ ベンヤミン/ 新教育/ 抑圧された声の救出/

どのような研究をなぜ行っているか

20世紀ドイツの思想家ヴァルター・ベンヤミン（1892-1940）を軸にした近・現代思想を手がかりにしながら、「教える-学ぶ」といった伝統的な図式では捉えきれない教育や人間形成の問題について研究しています。特に、社会のなかで抑圧されているまだ言葉にもなっていないような声を教育学のなかでどのように扱うことができるのかということに関心をもって研究に取り組んでいます。

20世紀最大の批評家と評されることもあるベンヤミンは、文芸批評の分野だけでなく、翻訳論、メディア論、都市論、歴史論などでも後世に大きな影響を与えている思想家です。彼は、反ユダヤ主義の嵐が吹き荒れるなか自分たちのユダヤ性を捨ててドイツ人に同化しようとした裕福な同化ユダヤ人家庭に生まれ、ドイツ人としてもユダヤ人としてもアイデンティティを容易に確立できない環境に置かれていたことが知られていますが、その状況は、どの党派にも属せないような抛り所のなさを引き受けながら現実を分析する彼の批評の鋭さを育んだと言われていています。こうした背景もあり、彼の思想は、文化的・宗教的マイノリティに関する議論やジェンダー論などでも非常によく参照されています。

近年、性的マイノリティ、外国人、子供、女性といった社会的に弱い立場に立たされてきた人々の声をすくい上げるような研究や実践が広く見られるようになってきています。学校現場でも「SDGs」や「LGBT」という言葉が流通し、「道徳教育」や「政治教育」や「市民性教育」のなかで個性や多様性を尊重した教育を行うことが求められるようになってきています。しかし、現実には生きる人々を具体的に見てみると、「LGBT」「貧困家庭」「発達障害」「外国人」という言葉では一括りにはできないような多様性があり、それどころかマジョリティとされる「普通の」人でさえ、他人とは容易に共有できない異質さや生きにくさを抱えて生きています。それは、本人ですら上手く表現できないような声であり、ただ発言の機会を与えれば済む問題ではありません。多様性や個性に関する議論を形骸化させないためには、社会のなかで抑圧されがちなこうした声なき声をただ既存の思考や言語の枠組みの中で処理するのではなく、既存の枠組みを突き破るような仕方で救い出していく必要があります。この抑圧された声の救出のプロセスは、本人にとっては自己発見や自己変容のプロセスであり、社会にとってはあらゆる人の声を尊重する民主主義のための条件であると言えます。

私の研究では、初期ベンヤミンの翻訳論・批評論を彼が置かれた上述のような社会状況や彼が青年期に関わった新教育運動との関連で考察することにより、以上のような問題に理論的な見通しを与えようと試みています。またこのような関心のもと、ベンヤミンや彼に影響を受けた思想を手がかりに、現代の社会や教育が前提としている政治理論や教育理論の批判的な検討も行っています。

研究成果をどのように活用し、どのような貢献ができるか

研究の成果として得た知見は、大学における教育学領域の専門教育や、「道徳教育」「特別活動」をはじめとした教職教育などに役立てることができると考えています。特に「道徳教育」に関しては、抽象的に見える価値を子供の具体的な生活や生き方との関係で具体的かつ多面的に捉える手法の開発などに、「特別活動」に関しては、民主的な集団形成の資質を育成する「政治教育」や「市民性教育」との関連で貢献できると考えています。また、異質な思考や言語をつなぐ広義の「翻訳」に関する研究を通じて、異文化理解や異質な他者との共生の取り組みに貢献できると考えています。

これまでの連携研究や社会貢献活動の実績

道徳教育に関する附属小学校との連携研究（2021）。また、奈良県の公立高校で非常勤講師（現代文）として行った授業などに研究で得た知見を反映しました。

